

維新史回廊だより



第21号
2014年
3月発行
年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会

■発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課
(山口市萬代一丁目三一〇三二二二二二二二)

維新史回廊だより第一一号をお届けします。「長州ファイブ」について、萩博物館の道迫真吾主任研究員に解説をお願いしました。

「長州ファイブ」の英國密航留学

一〇年ほどの間、「長野ファイブ」とこの言葉は、日本で誰もしない知り得ておませんでした。しかし近年、山口県にお住まとの歴史遺の間に、だんだんと発見されたのです。

「長州フライ」だと、文久三年（一八六三）長州藩がイギリスへ密かに送り込んだ、五人の留学生に与えられたグループ名称です。従来「長州五傑」と呼びならわされていたものが、イギリス風にも呼ばれるようになったといえども、「し理解いただけぬでしようか。集合写真を確認すれば、前列左から井上馨、山尾庸三、後列左から遠藤謹助、井上勝、伊藤博文となっています。昨年は、「長州フライ」の密航からちょうど一五〇年という節目にあつて、県内各地で関連の展示会や講演会などが催されました。全員の名を「し存じの方も、さらにそのうえを行つて、集合写真で顔と名を一致させることのできる方も一緒に、改めて五人の密航の足跡をたどり、その意義が奈辺にあるのかを探つてみましょ。

なお、五人が「長州ファイブ」と呼ばれるようになつたのは近年のことです。密航した当時、そのように呼ばれたという史実は伝わっていません。ijiで、便宜的にijiの呼称を使用することをあらかじめお断りします。



長州藩英國密航留学生集合写真（萩博物館蔵）

Q 五人が生まれ育った時代とは？

五人た生みられたのは一九世紀のなかは一八三〇年代から一八四〇年代にかけてのことです。最年長の井上馨は天保六年（一八三五）生まれで、遠藤謹助は天保七年、山尾庸三は天保八年、伊藤博文は天保十一年、最年少の井上勝は天保十四年と、全員が天保年間の生まれであるといふに共通点があります。ちなみに、明治國家建設の中心を担つた人物の多くが天保年間生まれであることから、彼らを「天保世代」と呼ぶこともあります。明治元年（一八六八）時点での彼らの年齢を見ると、三〇代から二〇代という若さでした。



ロンドン大学UCLの図（複製、萩博物館蔵）

さて、彼らが少年だったころ、欧米列強の東アジアへの進出が顕著になつていました。その象徴的な事件は嘉永六年（一八五三）のペリー来航です。黒船来航とも呼ばますが、その衝撃は大変なもので、徳川幕府はもとより、全国諸藩を大きく揺るがしました。鎖国を続けるべきだとか、外国船を撃ち捨づべき（攘夷）だとか、今は勝ち目がないから戦さを避けて開国すべきだとか、対外方針をどのようにするかで意見が分かれたのです。

欧米列強の東アジアへの進出は、島国である日本に対し、海岸防備すなわち海防という課題も突きつけました。海防を強化するためには、大砲や軍艦など武力の洋式化（近代化）が欠かせません。黒船来航後、幕府は、欧米列強に対抗しうる独自の海軍創設を目指すとともに、諸藩に対しても海軍力を強化するよう働きかけました。本州の西端に位置する長州藩の場合は、長い海岸線を有するという地理的環境も大きく影響し、海防に、あるいは海軍力の強化にと、困難をかえりみず積極的に挑戦しました。

Q 擅夷の長州藩がなぜ留学生を送り出したのか？

長州藩は文久一年（一八六一）、長井雅樂が提唱した航海遠略策に基づく公武合体・開国の藩是を撤回し、破約攘夷（即今攘夷、奉勅攘夷ともい）に決します。攘夷というのは、藩の方針を意味します。長州藩はこの藩是のもと、文久三年五月十日、下関海峡を通航する外国船を砲撃し、攘夷を実行しました。（これは、五人が密航する一日前のでき）とです。長州藩が欧米列強と戦う一方で、密航留学生を送り出したのは、当時藩政の実権を握っていた周布政之助の考えに基づいています。

周布は「攘は排（おしひらく）なり、排は開なり、攘夷^{じゆう}而して後國開べし」という揮毫を残しています。つまり、まず攘夷をして、そのうちに国を開くべきだというのです。周布は、幕府が列強の圧力により結ばれた条約を一旦破棄し、攘夷を実行して天皇を安心させられれば、将来、眞の開国に至ると考えていました。要は、現実的には開国すべき状況を理解しつつも、朝廷の意向を尊重し、列強とあえて一戦交えるというのです。

この考え方の源流は、尊王攘夷を唱えた吉田松陰にあります。幕府が安政五年（一八五八）、天皇の許しを得ずに日米修好通商条約に調印した際、松陰はこれを無効許（違効）調印であると痛烈に批判していました。ただし、こじでとくに注意が必要なのは、松陰がただ単純に攘夷を叫んだわけではなく、むしろ積極的に欧米列強の優れた知識・技術を摂取し、日本の国力を高める必要をも早くから訴えていた点です。松陰のアメリカへの密航失敗は、その具体的な表れといえます。

このように、長州藩は攘夷の藩是を掲げながら、実際は将来的な開国、つまり欧米との通交を視野に入れていました。長州藩は、新しい時代に対応できる人材を養成することを目的として、五人をイギリスへ派遣したのです。

Q 五人が密航にかけた思いとは?

五人の留学の背景には、周布政之助の強力なバックアップがありました。また、文久元年に幕府の遣欧使節に加わり、ヨーロッパを巡つて翌年帰国した長州藩士、杉孫七郎の見聞体験の影響もあったとされています。しかしながら、彼ら自身のうちに西洋へ行きたいという強い意志がなければ、命がけの密航は決して成功しなかつたにちがいありません。

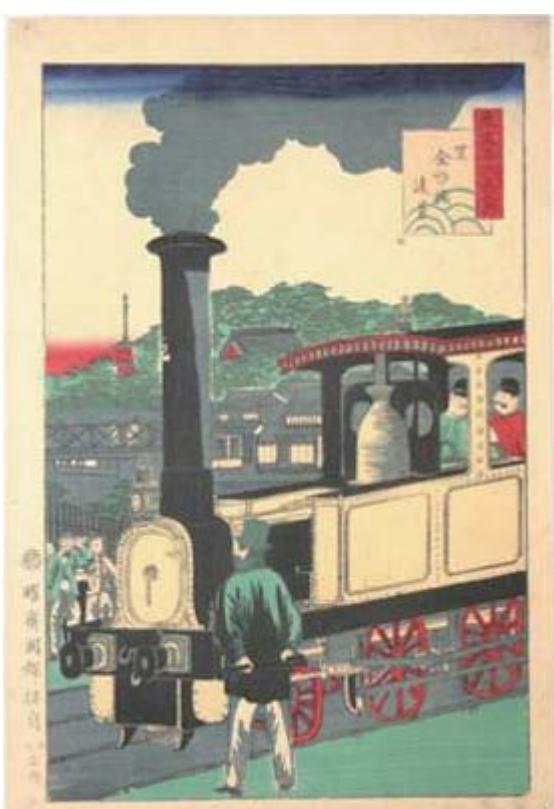
五人の思いは、密航する直前、連名で周布らに送った手紙に端的に示されています。五人は、渡航費用が不足しているため、五千両を横浜の商人から借用するに際し、大村益次郎（村田蔵六）を保証人にして藩の御用金一万両を無断で担保に入れてしまいました。これが藩に知れたら厳しい咎めを受けねばなりません。にもかかわらず、五人は「男子が志を立てた以上、お金の問題で志を果せぬとあっては不本意です」、あるいは「この金は飲み食いなどに使うわけではありません、運がよければ生きた器械を買つたとお思いになつてお許し下さい」と、苦しい心情を手紙につづったのです。

（こ）に出ている「生きた器械」という言葉は、五人が命がけで密航した目的を表します。つまり五人は、西洋の技術、とくに海軍術を身につけて帰国した暁には、長州藩が真の攘夷を実現できるよう、「一生懸命働きます！」と宣言したのです。

Q 密航して何を学んだのか?

文久三年五月十一日（西暦一八六三年六月二十七日）未明、五人は英國船に潜り込み、横浜港を出発しました。数え年で上から順に、井上馨（二十九）、遠藤謹助（二八）・山尾庸三（二七）・伊藤博文（二三）・井上勝（一一）と、五人は青年期を迎えていました。

五人は途中、清国（中国）の上海に寄港しました。（こ）から遠藤・山尾・井上勝はホワイトアッダー号で六月一日（七月十七日）に、井上馨・伊藤はペガサス号で六月六日（七月二十一日）にそれぞれ出発します。そして、前



東京各大区之内 芝金杉橋遠景（萩博物館蔵）

者は九月一十六日（十一月七日）に、後者は十月十一日（十一月十一日）に、それぞれロンドンに到着しました。実に、四ヵ月以上も要する大船旅だったのです。ちなみに、井上馨は後年、船中では航海術の訓練と間違われて水夫同然の扱いを受けたという談話を残しています。

五人は、イギリスで最新の海軍術を獲得する目的としていました。強力な大砲と軍艦を自在に操れる「生きた器械」になると決意し、むりむり渡英してきたのです。

五人は、密航を手助けしてくれたイギリスのジャー・ディン・マセソン商会の仲介により、ロンドン大学で学びました。大学では、化学教授アレキサンダー・ウェーリアムソンに師事し、分析化学を中心とする自然科学系の授業や実験に参加しました。ウェーリアムソン教授夫妻は、自宅に五人を招き入れ、親身になつて世話をしたそうです。

五人が現地で目にしたのは、大英帝国と称される圧倒的なイギリスの国力でした。高層建築、蒸気機関車、工場、銀行、博物館など、目に映るものす

續を残しました。簡潔にいえば、伊藤博文は初代内閣総理大臣、井上勝は鉄道庁長官（鉄道の父）、遠藤謹助は造幣局長という肩書をもっています。「これを見ただけでも、近代国家形成に果たした彼らの役割の大きさがよくわかります。」このように、五人は当初、イギリスで攘夷に必要な知識・技術を習得しようと決心していたのですが、実際に現地に行くと、攘夷は実現不可能である



憲法発布式の図（萩博物館蔵）

「こうして五人は、渡英を果たすや攘夷という考えが無謀であることを悟ります。そのつえで、あらゆる先進的な文物・技術を日本に採り入れて、歐米列強に対抗しうる力を蓄えようと決意を新たにします。五人は、攘夷から開国へと主義を転換したのです。

井上馨と伊藤は渡英からわずか半年後に、遠藤は一年後に、山尾と井上勝は五年後に、それぞれ帰国します。その後は、日本

の近代化・工業化に顕著な功績を残しました。簡潔にいえば、伊藤博文は初代内閣総理大臣、井上勝は初代外務大臣、山尾庸三は工部卿（工業の父）、井上馨は鉄道の父、遠藤謹助は造幣局長という肩書をもっています。「これを見ただけでも、近代国家形成に果たした彼らの役割の大さがよくわかります。

（このように、五人は当初、イギリスで攘夷に必要な知識・技術を習得しようとしたのですが、実際に現地に行くと、攘夷は実現不可能である

べてが脅威であり、また驚異でもあったことでしょう。」この重要なのは、五人があえて命の危険を冒してまで日本を飛び出し、産業革命癡祥の国、イギリスを五感で体験することができたということです。

現在、グローバリゼーション（地球規模化）が急速に拡大・進行するなかで、さまざまな難問が私たちの前に立ちはだかっています。こうした状況にあるからこそ、私たちには、一五〇年前の「長州ファイブ」に学ぶ姿勢が必要ではないでしょうか。

〈参考文献〉

犬塚孝明著『密航留学生たちの明治維新—井上馨と幕末藩士』

（日本放送出版協会、一九〇一年）

元綱数道著「長州藩密航留学生の航跡」

（『新・史都萩』第一〇号、一九〇六年）

萩博物館編『幕末明治の洋行者たち—萩博物館所蔵古写真集成（一）—』

（萩博物館、一九一三年）

拙著『長州ファイブ物語—工業化に挑んだサムライたち—』

（萩ものがたり、一九一〇年）

〈お詫び〉

維新史回廊だより第一〇回に誤りがありましたので、訂正いたします。

3頁(下段8行目) (誤) 山形有朋
(正) 山県有朋

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館・県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。
次回は今年の月発行の予定です。どうぞ御期待ください。